

都市部における乳児養育〔2〕

中 田 幸 子

3. 食 事 と 睡 眠

- a 食 事
- b 睡 眠
- c 寝かしつけ

4. 社会性の根源

- a 泣かせておく

(総目次は前号参照)

3. 食 事 と 睡 眠

a. 食 事

全体的にみて、乳児は今日非常によく養育されている。面接のときに、その時以前の24時間以内に与えた食物について聞いた。予備調査のときに、前日の食事内容について、母親たちが非常によく記憶していることが分った。そこで、このような形で質問する方が、実際に特定の日に乳児が与えられた食事を知る上で信頼性がある答が得られると考えられた。つまり、母親が「理想的」と考える食事ではなく、実際を知るためにである。家庭の食事内容にはよい日と悪い日とがある。そこで、このような方法を取りながらごちそうの多い日曜日の昼食と、洗濯日にあたる日曜のよせ集めの昼食とは取り除くことにした。

細部にわたって分析するに当って、1日の食量でビタミンCか蛋白質、あるいはその両方が不足していないかを検討した。たった1日を対象にしたものであったが、分析結果は確信を新たにさせた。7%未満がビタミンCが不足し、7%未満が蛋白質が不足していたが、両者が不足しているのはわずかに1/2%しかなかった。そして、65%の乳児は1日1ポイント(約3.15合, 0.57l)また

はそれ以上のミルクを与えられていた。食事内容が単に適當であっただけでなく、むしろ豊富で、種類も多く、食欲をそそり、比較的高価なものが与えられているという印象をうけた。すでに記したように、この時期になると、他の家族と同じ物も可成り食べることが多くなる。しかし、大人用の食事が適さないときには、乳児用の特別食が大ていの場合作られていた。所得を得てくる父親が肉をたべ、子供は馬鈴薯と肉汁で食事をするというようなことはもうあまりみられなかった。まだ歯が生えていないことから、完全に大人と同じものが与えられないこの段階では、鶏卵かチーズかその他の食品で蛋白質が日中に与えられており、その上に大人の食事から野菜や肉汁が与えられるのが普通である。缶詰の乳児食やプディングの使用も広く行なわれていた。——八百屋の乳児で1週間に30缶与えられているケースもあった。——そして、乳児のためにいろいろな菓子類も沢山買われていた。イギリスの家庭では、これまでのどの時期よりもよい哺育がなされ、それがまた賢明な方法でなされているという印象をうけた。そして、1歳児は、一般的な繁栄の増加に伴って分に応じた分け前を受けているということがいえよう。

ここで注意しておいた方がよいと思われることは、この地域の多くの乳児は特に父親が昼食を外でする場合、早い時期から“high tea”⁽²⁴⁾が与えられるということである。昼食時にはスナック程度ですませ、勤めから夕方帰る人にとっては、夕食が主な食事となるからである。昼食を日中で一番重い食事とする場合には、high tea や、大人の夜の食事時にも栄養となるものが与えられる機会があるが、このように昼食を軽くすます場合には、high tea だけが食物の種類が多く、他の時には食パンにバター、馬鈴薯のチップに紅茶またはミルク入り紅茶程度ですまされる場合が多いようである。

この段階の乳幼児には「お十時」「お三時」が与えられるのが普通のように、与えられるものはビスケットと飲み物——フルーツジュース、牛乳、紅茶、またはミルクコーヒーが一般的である——などである。

児童の食事について一層具体的に知るために、ビタミンの補給をしているか

どうかも尋ねた。2歳以下の児童に対するビタミンの主な補給源は、保健省から出されるビタミンのクーポンによる。調査時には、6オンス(約9勺, 1.6l)ビンの5ペンス(約20円)の濃縮オレンジジュースや、無料の肝油などが中心で、この他に、民間で作られる rose-hip syrup (ビタミンC) や Adexolin (ビタミンAとD) も割引価格で診療所から手に入れられていた。

13%の回答者は全くビタミンの補給をしていないといった。このうち1~2は原則としては与えない。

80%はビタミンCを特に与えているといい、58%は福祉オレンジジュース⁽²⁵⁾を用い、22%は、rose-hip syrup, blackcurrant syrup, Haliborange その他のものを用いていた。この22%の中には、生の果物やトマトのジュースを毎日与えていると特に補給の意味で答えた者も含めてある。58%の中には、福祉オレンジジュースの他にビタミンCを与えている者も含まれる。また、極めて少数ではあったが、ビタミンCを含むといわれる種々の商品には、実際にはあまりCが含まれていなかったり全く含まれていないと述べた母親もあつた。⁽²⁶⁾

ビタミンAとDとはCに比べると一般的ではなく、また、Health visitor (以下H.V.と示す.)と大学側の調査者に対する回答との間にひらきがあつた。30%は、H.V.に対して、福祉肝油(Welfare cod-liver oil)を用いていると述べ、31%はその他の肝油類を用いていると述べたのに対し、大学の調査者に対しては福祉肝油は21%で、27%は他の商品を買っていると述べている。H.V.は肝油を奨励する立場にあること、ビタミンAはオレンジジュースに比べると魅力がないこと(多くの母親は肝油の油くさい臭いを極端に嫌っている)などから、このような回答の差は予期した所であつた。また、これらの数字を見るときに注意しなければならないのは、母親たちがビタミンについての好ましいあり方を知っているため、実際より過大に表現されている可能性があるということである。

多分、経済的繁栄によると考えられるが、多くの家庭では変化に富んだ食事を与えることが可能で、1歳児の養育が困難な家庭は非常に少なかった。「作

った食事をもし食べなかったらどうしますか⁽²⁷⁾」という問に対して、このような状態が大部分の家庭では何の問題にもならないことが分った。子どもがある程度成長すると、このような時には母子のいい争いが食卓をはさんで起るであろうが、1歳児の母親は好き嫌いに対して一般的に可成り寛大で、食べなくても問題にされない。大きな子に対しては、食卓に用意されたものは食べてしまうようにいう母親も、この時期には特にしつけの問題として扱かわれないからである。4/5以上の母親が、われわれの「無関心」とした項目に該当する。これに属する回答の典型的なのは「そのままにしておく」、「何か他のものを与える」「食べなくなるまで待っている」「便所に捨てるか猫にやる」などである。われわれが度々いわれたことは、用意したものを食べないというようなことはめったにないということであった。この時期の児童は、もう少し大きい子供たちのように食事に大騒ぎするわけではないし、母親に対抗する武器として自分を餓えさせるなどという事もまだ知っていないので、このような母親のいう所は正しいと思われる。さらに、12カ月児は自分でスプーンを用い始める時期にある。その時期の児童にとって食事時は新しい種類の遊びのできる時として楽しい時にちがいない。食べるということは単に肉体的な満足だけではなく、興味深いものなのである。

10%足らずが「少し考慮」する部類に属した。ここでは、食べることをすすめるために努力を可成りするとか、食べるようにするためにゲームを考え出すなどが含まれる。

極く少数の母親が「熱心」で、この場合は、何とか食べさせてしまうため、食事は戦争のようなものである。このような場合は、1歳児で食事の困難な場合が多く、母親の心配が原因か、児童自身の気質のせいかわ決し難いが、多くは相互に状態を悪くしているように思われる⁽²⁸⁾。この部類に属する回答をした母親は第1子の母親で、他にすでに子を持つ母親は、自分の過去の試みと失敗から、食事についてこのような意味で強要する態度をとっていなかった。

b. 睡眠

幼児が就寝に要する時間と、ねかしつけるために母親の費す時間は1歳前後の児童の母親にとって重大な関心事になりがちである。排便のしつけが、睡眠時間の長さに代って家族の話題になるまでは、母親は自分の知っている他の子たちと比べてみたり、母親の想像から勝手に決めた基準と比べてみたり、また、育児書と比較して、自負したり、心配したり、あるいはいらいらしたり恥かしがる主題となっている。就寝の習慣と便宜主義について母親たちと討論すると、必ず寝床にあって寝就かない状態が問題となった。そこで、第1に就寝を困難にしている要因を調べる必要があった。12カ月児は1日に何時間眠るものであるか、また個人差はどの位あるかなどについて。

大人の場合、睡眠の要求時間と実際の睡眠時間とは一致しない方が多い。しかし、1歳児は、普通ねむたくなればいつでも寝られる状態にあり、自然に眼があくまで十分寝ることができる。したがって、個々の幼児の実際の睡眠時間を、その子の要する睡眠時間と同意義に解することにした。

この仮定を得るために、特定の日の睡眠時間について、実際的で独特な質問を用いることにした。食事についての場合と同様に、このようにすれば「正常な睡眠」(normal sleep)についての回答よりも実際を知り得ると信じたからである。そのため、面接日の朝、その子が起きるまでの24時間を調査対象に限定した。母親たちは昨夜は何時に寝床へ入れたか、それからどの位で眠ったか、夜中に起きたか、起きた場合どの位の位の間起きていたか、そして今朝は最終的には何時に起きたか(この時期の多くの児童は早く目覚めるが、そのまま哺乳ビンを与えられ、さらに1～2時間母親のベットの位で寝る、)そして合計何時間実際に眠ったかなどを、「休む」あるいは「乳母車で」を区別して尋ねられた。実際の睡眠時間を得るために、活動的でなかったときや、乳母車で泣いていた時間などを除くため数多くの質問が用いられた。そして、最後に、そのような睡眠の型がその子にとって日常のものであるかどうかを尋ねた。

「昨夜はいつもより少し遅かった」という母親が大部分で「少し早かった」という人にはほとんど出遭わなかった。これは、就寝時間が遅いことに対する

批判を避けるための母親の発言であると考えられる。したがって、睡眠時間を分析するに当って、このような母親の発言は、遅かったことについてはっきりとした理由が述べられた場合にだけ考慮に入れ、他は無視することにした。たとえば、病気であったとか、歯が痛んでいたとか、外出して遅く帰宅したなどである。同様に、夜中に起きていた時間についてもわれわれの裁量による分析を行なった。「昨夜はよく起きた」と答えたものは、普通1週間に2～3回起きると同じように分類した。歯痛で泣いていたものや、毎晩起きて泣いたり、毎晩ではないがほとんど毎夜1～2時間相手を要する状態のものは除外した。たまには、前日の子どもの睡眠時間のはっきりしない母親があった。そこで確実な答の得られなかった約5%を除外したが、睡眠というようなテーマであるから、この位の除外が全体の数字に大きな影響を与えるとは考えられない。

分析結果は（無作為抽出のサンプルだけによる）、12カ月児は24時間中に平均13.6時間の睡眠時間をとっている。そのうち、やはり平均で12時間足らずが夜間にとられ、残りは日中にとられていた。もちろん、可成りの個人差があり、それについてもふれるが、ここで見出された睡眠時間は、「正常な必要睡眠時間」⁽²⁹⁾として育児書で述べられているものと区別するものとして、他の調査者の行なった調査結果と非常に近いものであると思われる。この調査以前になされた調査による平均睡眠時間をこの調査結果と合わせてまとめたのが第7表である。

〔第7表〕 年齢別1日当り睡眠時間

	年齢別	平均睡眠時間	対象数
Kleitman と Engelmann ⁽³⁰⁾	3 週間	14.9時間	10
Kleitman と Engelmann	3 カ月	14.9	19
Kleitman と Engelmann	6 カ月	13.7	16
こ の 調 査	12カ月	13.6	476
Kleitman, 諸研究に 基づく ⁽³⁰⁾	2 年 5 年	13 11.5	

⁽³¹⁾Wilkinson はこれらの研究を検討し、乳幼児に要求されている睡眠時間は驚

くべきであると指摘し、出生直後の乳児はほとんど全時間を寝ていると考えている一般の考え方とはっきり矛盾するこれらの数字に驚きを示した。育児書は、乳児が静かに寝ないときには、何かはっきりとした肉体的な原因があるということを母親に印象づけようとする傾向がある。もし、乳児が「落ち着く」ことに失敗したら、快適でないと感じる何か理由があるのではないかを見出すようにすすめられる。多分まだおなかがすいているのではないか、不消化なのではないか、暑すぎあるいは寒すぎるのではないか、おむつがかえてほしいのではないかなど。そして、授乳から次の授乳までの間に寝ないことも正常で、退屈のため泣くこともよくあるなどについては稀にしか知らされていない。生後間もない乳児にとって「良いこと」とは、目覚めないで長時間眠る能力と多くの場合同意義に解される。母親は誰でも近隣から、「お子さんはよい赤ちゃんですか」（ほとんど熟睡状態にありますかの意味）と尋ねられる。これに対する完全と思われる答は、「ええ、とてもいい子です。どうしてこんないい子がさづかったか分らない位です。」というのである。さらに、「良い」乳児の扱い方の目的は、「良い」乳児を作り出すことにあるようにみえる。そして新米の母親は、経験があり有能な母親や乳児専門の看護婦たちは、乳児が自然に「良く」なるような、つまり、少しか要求を示さないような子に育てるための幼ない乳児の扱い方の独特な能力をもっているものと信じさせられる場合が多い。結局、母親たちは、静かで、やさしく、しかし、しっかりしているように教えられ、必要な場合以外にあまり抱き上げないようにすすめられる。他方、乳児を不必要に泣かしっぱなしにするのはよくない。秘決はこの両者のどこに区別の線を引くかを知ることにある。一般的には、よく目を覚ます子は、つまり要求がある子で、彼らはスポイルされてきたためにこのようであると考えることができる。

また、他の子よりもずっと多くの睡眠時間を必要とする子のあることも事実である。この調査結果でも、睡眠時間には可成りの個人差のあることが明らかになった。少数の1歳児は24時間中僅かに9時間しか寝ないのに対し、長い方

では1人か2人であったが18時間も睡眠時間を必要とすると思われるものもあった。

睡眠時間にみられるこのような格差は、就寝時間にも当然反映している。僅かに5%のものが、昼寝をしていなかった。昼寝の長さは、僅かに15分のものから、5時間のものまであった。1歳児に対しては、一般的には昼食の前か後に床につかせることが多く行なわれている。しかし、中には、昼食の前後に普通休むものもあった。最も多く行なわれている就寝時間は7時頃であるが、31%は6時30分以前に寝床へいれられ、約5%は9時30分以後であった。両親と同じ時間に床につくものも少数ながらあった。このように遅く床につく者の数には、食堂や乳母車で寝てしまい、後になってから床に移されるものは含んでいない。どこで寝始めても、夜の就寝と思われる眠りに就いたときを基準にした。

「良い」子は夜通し寝続けるものであると考えられているにもかかわらず、両親は経験から、何度か夜中に起こされることを知っていた。12カ月児の場合、大部分は夜通し寝ると母親たちはいうが、35%の母親は、調査の前夜起こされたと報じた。そして、何れの場合も、どちらかの親が子のために起き上げなければならなかった。また、16%のものは、毎夜必ず起き、さらに多くのものは1週に2回は起きていた。60~70%の母親は、1週に1回起る夜があるといっていた。

60%の1歳児は、まだ両親の寝室で休んでいた。14%は兄弟姉妹など両親以外の人と同室で、僅かに26%だけが個人で1人で休んでいた。住宅不足がこの大きな要因であると考えられるが、同室の比率が非常に高いので、これらの家庭では可成り人口密度が高いということができよう。この時期の子は他のほうのような子とも同室であることを好むので、大部分の母親は何回となく夜中に起こされていることになる。空いている部屋が仮にあっても、同室の方が便利である。母親自身のためにも、また寝ている他の人たちを起さないためにも。また、居間で親のいる傍で寝始めるのも(8%)、他の子の睡眠を妨げないため

の一般的な理由である。継続的な会話やテレビの音は、家の中や道路での子どもの声程に乳児を起さないものである。

親や兄弟姉妹と同じベットの寝る子の数は無視してよい程少なく、ほとんど全ての子は自分の休む場を与えられていた。後で見るように、夜中にしばしば起きる子の場合、早く寝かしつける便法として、親や姉のベットへつれこまれ、その夜の一部分をこれらの人と共に寝ていた。

c 寝かしつけ

子どもを寝かしつける方法にはいろいろなやり方があった。多くの母親は、ただ子どもをつれていき、ベットにおいてくると答えたが、さらに尋ねていくと、その多くは、抱いてベットへつれていき、哺乳ビンかおしゃぶりを与えていることが明になった。43%は哺乳ビンかおしゃぶるか、あるいはその両方が与えられ、全体の約3分の1の乳児は床に入れられる前に、その子がねむくなるまで相手になってもらった上、母親の膝の上で温かい飲物を哺乳ビンで与えられていた。生後はじめて経験する快感は、ゆったりとした状態で吸うことで、この状態と、満足の継続は寝つくことによって終了する。もっと積極的な方法で就寝を助けていた母親もあった。⁽³³⁾

母親たちは、寝つくまで相手になることが、子をスポイルする方法であることを知っている。そのため、H.V.に対するものと、大学側とでは可成り回答に開きがあった。⁽³⁴⁾このような回答の開きにも拘らず、この年令の子に対して、ただ寝床につれていき、休ませる以上何もしない母親は非常に少ないと結論づけることができる。

さらに、「もしちっとも寝ようとしなかったり、床に入れておいてきた後泣き出したらどうするか」という問と、「泣き続けている場合はどうするか」を尋ねた。

寝つきの悪い子に対する母親の態度には二種類あった。一つは、寝つかなくても、また泣き出してもほっておいて最後まで1人で休むようにするタイプで、中には1人2人であったが、寝ないことを怒って罰するものもあった。も

う一つのタイプはこれ程ではないがそのうちに寝るとよいと思いながら10分位までは泣かしておくもので、この場合は、あまり泣き止まないと傍へいき寝かすようにしむけたり、それでもだめなときには階下へつれてきて家族と共にすごさせたりする。この中には、泣き出すとすぐに傍へいく場合や、寝つくまで傍にいたので泣くことがない場合や、寝つきそうでなければ寝かしつける努力は少しもしないですぐ階下へつれていく場合もあった。きびしい態度のはじめのグループでは、寝るまで泣かすことをすすめる人が多く、いったん母親自身がそれで満足すれば、肉体的には何も悪影響はないとしている。特に、このような状態は母親と子の対立する意思の衝突と考えられ、きびしい態度をとっている母親は子どもに負けるべきではなく、勝利者となるべきと考えたいた。しかし、このような厳格さを維持していたものは11%にしかすぎなかった。⁽³⁵⁾

第2のグループは89%で、意思が第1のグループより弱い、子どもに同情的な人たちで、子どもの願いに答えるという意味でだけそうしていると考えていた。⁽³⁶⁾

子どもを階下につれてくることは、ベットのままで寝つかせるよりももっと寛大なやり方で、医者や育児書やH.V.はすすめない。そこで、階下まで子どもをつれてくる母親の割合を別個に表わしてみることにした。この場合もH.V.と大学側とでは異った率の回答が得られた。大学側は59%のものが階下につれてくるといったが、H.V.には41%しかなかった。診療所の態度は、この点についてははっきりしているため、大学側に答えた母親たちの中にも、悪いことをしているような気持を示すものが多かったので、実際には59%以上と考えられる。そこで、大部分の母親は、育児で好ましい方法として教えられている所よりも、就寝時には可成り寛大で、一度ベットへ入れてから再びつれ出してくることをしている人たちが半数以上であるということになる。

このような寛大さ、甘やかしは「夜中に起きたときどうするか」という問に対する回答にもあらわれた。全体の43%は、おむつをかえたり、話しかけたり、ゆりうごかしてやったり、寝つくまで傍にいたり、親のベットへつれこむ

など積極的になだめることをしていた。これに加えて、大学側のは55%、H.V.には33%が、哺乳ビンかおしゃぶを与えている。23%は、H.V.に対しておむつを取りかえ、だきあげるだけでまた泣かしておくというのに対し、わずかに6%が大学側にはそのように答えた。大学側では、33%が両親のベットへつれこみ、21%がH.V.にこれに反対する意見をのべた。いったん寝かしにいった子をつれてくることは、広く母親に悪いことと考えられ、育児の専門家もほとんど例外なく、最も早く、確実に子どもをスポイルする方法であると指摘している。

12カ月児の就寝時の扱いは、厳密なものよりも寛大な方が一般的なようである。子どもが大きくなってから急に厳格にされるのか、最年少者として特権的に扱われているのかこの調査では何ともいえない。調査対象地区の育児に限定すると、大半の母親は、初めからきびしく習慣づけるようにというアドバイスをほとんど無視しているようにみえる。⁽³⁷⁾

4. 社会性の根源

就寝時についての母親の回答を通して、泣くことに対する母親の態度をかなり知ることができたので、さらに就寝時以外に泣いた場合にどんな感じがするかについて討論を行なった。泣くということがこの年令では唯一の意思表示の方法であるから、それに対する母親の態度や感じ方を知ることによって、しつけや社会性の養育についての母親の態度をかなり知ることができる。そこで、子どもの泣声の意味を母親がどうして確かめ、どの位早くそれに応えるかを見出すことにした。

N市では、よく泣く子を一般に“mardy baby”と呼ぶ。この方言は用いられる場合によっていろいろな意味を有するが、極く小さい子に対してはよく泣く子という意味で、道徳的な意味は含まれない。1歳児以後になると、しょっちゅう泣いている子、ちょっとしたことですぐ泣く子、または、同情や注意を引くために泣いて、自分のすきなようにする子などの意味に用いられる。この

ように形容詞の 'mardy' は、動詞の 'to mar' (だめにする, スポイルする) からきたもののようで, mardy baby とはスポイルされた子ということになる。大部分の母親は, 子どもに大騒ぎをしたり, 何でも見境なく要求を入れたりすることが, スポイルすることとなる危険性をもつものであることを知っている。しかし, また, 生まれながらに問題をもち, そのために特に要求をもつ子たちのあることも知っていた。しかし, 少数の母親は, 子どもと遊んだりちやほやしすぎると, スポイルすることになると信じていた。

12カ月でも, スポイルすることはあり得ると大部分の母親は考えていたが, どの位の注意までは許されるのかという点になると, 意見は非常に分れていた。極端に寛大な人は, 早く, 容易に子どもの要求に応えるべきで, 欲求不満は肉体的な危険を伴うおそれもあるとする。他は, 子どもは道徳を侵すもので, 原則のゆるめられることを待っているものであるとして常に考え, 少し与えると全部欲しがるとしてきびしく養育していた。また, 考え方ではきびしく, 実際には寛大というのもあった。

a. 泣かせておく

「泣かせばなしにすることは何か害があると思うか」という問を会話の糸口として「どの位の間泣かせておくか」など聞いていった。害にならないという医療機関からの知識が先づ答えられ, 次いで実際に語られた。もし害にならないと考えるならばと前置して, どの位泣かせておくかと尋ねたのに対しては, 「あまり長くはほっておかない」とか「5分以上」「1時間以上」はほっておかないなどが答えられた。

中には, 泣き方で区別し, すずり泣きには相手になり, 甘え泣きや怒り泣きはほっておくなどもあった。この点についてもかなり見解は分れた。寛大なグループでは, この年令の子が理由もないのに泣くわけがないと考え, 泣かしたり, 不幸にすることは, 子供の精神および肉体の健康上できるだけ避けるべきであるとしていた。泣いているのは不幸のあらわれで, 不幸であることは道徳的に価値のないことであるから, できるだけ避けるべきであるというのが, こ

れらの人たちの考え方である。

一方、厳格な人たちは、泣かせっぱなしにしておき、子どもは強情でずるいもので、12カ月児でもそのような傾向がすでにでてきているからきびしく扱うべきであるとの見解であった。子どもは「誰が主人」であるかを知るべきであるし、いつでも自分の思い通りにはいかないことを知るのに小さすぎはしない。一度訓練の場を失うと、再びきびしくすることは非常にむづかしいなどが、きびしくする理由であった。

泣く子を抱きあげてすぐ泣きやんだ場合の見方も、一方は、どこも悪くないから泣きやむんであるとして、またすぐ抱くのをやめて泣かせるといい、他方は、抱かれることを望んでいたから泣きやんだのだから抱いてやるというなど、根本的な態度の差から非常に異なった見解が得られたし、子ども自身の見方も違っていた。厳しい方の母親は、小さな敵として疑をもって子どもを見、寛大な方は、子どもの幸福が母親自身の主目的であった。また、寛大な母親は、泣くことをずるい試みとは考えず、単に意思伝達の方法とみるため、すぐそれに応えようとするのである。

これら二つのグループ以外に、泣き声をきいているのがいやまたは耐えられないという理由や、自分はがまんできるが近所や、他の子などを述べた者もあった。

最後に、少数であるが、泣くことは積極的に子どものためになり、子どもは(38)なくことを楽しんでいるとした者があった。

われわれの得た一般的な印象は、過半数の母親は泣くという問題について何らかの矛盾を意識しているということであった。原則的にはきびしくあるべきと思いながら、自然の傾向から子どもには親切にと願っていた。わずかに33%が15分以上ほっておくと答え、はっきりとした害はなくても30分以上ほっておくのは8%足らずであった。また、多くの母親が、女の子にはかまわないが、男の子は脱腸になるかもしれないと答えたので、男女の扱いに差があるかもしれないと思ったが、何も分らなかった。

与えられている指示に反し、子をスポイルするかもしれないやり方を明らかにしたくない母親が多いことは明らかである。H. V. には、16% が短い時間（5分以内）がたってから子どもの所へいくと答え、大学側には、31%が同じ答をした。医者でも看護婦でも、専門的なアドバイスをする人は、長い目でみると厳しい方がより親切であると説いている。しかし、実際には、そうすることは大部分の母親にとってむづかしく、実行不可能なこととされている。そのため、母親自身が悪いことをしているように思っていたり、アドバイスした人を非難する結果になっている。

注 (22) 前号68ページ参照。

(23) W. S. Crawford, Ltd., Market Research Division ; The Foods We Eat (Cassel, 1958)

(24) (訳者注) 4時前後のお茶の時間にコールドミートなど肉類を加えて夕食の代りにするのを一般に“high tea”と呼んでいる。

(25) この時以後、Welfare orange juice の価格は1シリング6ペンス（約75円）にあがり、消費は極端に減少した。

(26) Which? という消費者団体は、1960年、United Dairies のオレンジ飲料にはビタミンCが全く含まれていないと報じている。新鮮なオレンジからのジュースには10mg、福祉オレンジジュースには56mgがそれぞれ1オンス当り含まれている、と。

(27) 質問の項目は前号50ページ以下参照。

(28) 「いつも何時間もかかります。と診療所で言いましたら、『いつもそんなだったら、あなたはお嬢さんにどうしろといたいんですか』といわれました。私は子どもが何が好きか分かりません」

「彼はいつも気まぐれなことばかりします。私は時々怒ってしまうのですが、それは当然だと思うんです。食物は遊びの対象ではないことを教えられるべきですし、食べるべきです。そして、たとえ1歳でしかなくても食物を食べる習慣を身につけていくべきです。」

(訳者 注) これらは母子関係が相互的であることを示す例として本文中に述べられている会話である。

(29) 例えば、最も広く読まれている‘Ostermcllk Baby Book’によると、「一般的に承認されている所では、1～3カ月児は24時間中19時間を眠る。3～6カ児は18時間、6～9カ月児は16時間」となっている。

- (30) N. Kleitman and T.G. Engelmann 'Sleep Characteristics of Infants, Journ. Applied Physiol., 6. 1953, pp.216—82,
- (31) N. Kleitman, Sleep and Wakefulness, pp.166—70 (Chicago, 1939)
- (32) R.T. Wilkinson: 'How much sleep do we need?' ; the Listener, Vol. LXV, No.1659, p.70.
- (33) 本文中に述べられている事例では、早く寝かせるために母親が膝にだいて哺乳ビンを与えとか、寝つくまでその部屋にいてお話をしてやるとか、一緒に母親は自分のベットで寝たふりをするとか歌を唄ってやるとか、姉と一緒に休ませ、寝ついてからベットをかえてやるとか、寝つくまで傍にいて頭をたたいてやるなどがある。
- (34) 「積極的に相手になる」との答は、Health Visitor には15%だったのに大学側は23%を得た。
- (35) 本文中に述べられている事例では、小さいし可哀そうだが、1回子どものところへ行くとかせになるし、いつでも行ってやれるわけではないので厳しさを保っているなどが挙げられている。
- (36) 泣かせっぱなしにしておくと、近所の人が私が子どもを殺そうとしていると思うかもしれないとか、泣くのはどこかが悪いからだと思うからとか、泣き声を聞くのはいやだからなどの回答が紹介されている。
- (37) ノッテインガム市内が対象地区である。前号46ページ参照。
- (38) 肺の運動になる、声がよくなる、よく眠れるようになる、力がつく及び楽しんでいるなど面接で得られた回答が述べられている。